



# かけぬいっかし通信

～仲間とともに伸びる子 主体的に学ぶ子 いのち・人権を大切にする子～

<今月の巻頭言>

校長 松宮 孝明

## 「親に教えてもらったこと」

親に教えてもらい、大事にしている言葉・・・

「本当に夢をつかみたいなら、人の何倍もの努力がいるよ。」

芸能界に入るのを最初は反対だった父。

カメラマンだった父は、「撮られるのは、他の仕事をしている人より体力や精神力がいるよ。」と。

でも、私の強い願いに、「消費されるスピードを凌駕して、新しいモノを生み出すことができるのなら、挑戦してみなさい。」と応援してくれるようになった。

父らしく、背中を押してくれた。

NHK連続テレビ小説「あさが来た」への出演が決まったとき、みんなで大げさに喜んでくれた。父は、陰でこっそり泣いてくれた。

「これからも、自分の信じることをやり続けるんだよ。」と言って。

私を認めてくれた瞬間だったなあと思う。次の仕事を不安がるのではなく、楽しみに思い描くものだよとも教えてもらいました。

親は、離れていても、子が迷ったり悩んだりしていることを察してくれるんですね。以上、京都出身の女優さん、吉岡里帆さんの話でした。

いくつになっても、子どもは子ども。心配してくれているんだなあということを子どもなりに少しずつでも理解していってくれるものなんですね。そして、私たち保護者、親も、子どもがいくつになっても、心配し続けるんでしょうね。

そこで、本校の先生方にも、「親に教えてもらったということある？」と聞いてみました。その声をいくつか、紹介します。

- 「ありがとうを忘れない人になれ。」と言われたのを覚えています。
- 「その時、その時の絵をかけ。いろいろ前もって考えるのではなく、そういう事態になってしまった時、動じないでその時に応じた対応を臨機応変に行動したら大丈夫だから。」ということ言われてきました。
- 「返事をしなさい。」「食べ物を粗末にするな。」の2つです。病院などで名前を呼ばれたときは、必ず返事をしないと叱られたりしました。
- 好きな本を好きなだけ買ってもらいました。「飲み代に較べたら安いもんや。」とよく言っていました。父からは本を読むことの楽しさを教えてもらいました。
- 父の生き方が好きなのですが、曲がったことは大嫌いです。また、人が嫌がる仕事を引き受ける父のことを誇らしいと思っています。・・・・

## 短縮4時間授業の日課について

給食終了後しばらくは、午前中の授業となりますが、7月27日（月）～7月29日（水）の期間は、左のような日課で4時間授業を行います。下校時刻は11時50分となりますのでご承知ください。（3時間授業の日は、11時45分が下校時刻です）

## 熱中症および新型コロナウイルス感染症対策として

学校では、登下校時に日傘を差すことをすすめています。これは太陽光を遮ることとともに、ソーシャルディスタンスを保つことにも効果が期待できます。ぜひ、ご家庭でも日傘の活用をご検討ください。

\*安全確保の観点より、傘を差す際は、1列になって登下校をします。

短縮4校時間	
8:20	けんこうのけんさつ あさのかい 健康観察・朝の会
8:30	じかんめ (40分) 1時間目
9:10	じゅんび いどう (5分) 準備・移動
9:15	じかんめ (40分) 2時間目
9:55	じゅんび いどう (10分) 準備・移動
10:05	じかんめ (40分) 3時間目
10:45	じゅんび いどう (5分) 準備・移動
10:50	じかんめ (40分) 4時間目
11:30	かえりのかい 帰りの会
11:50	かんぜんげんたう 完全下校

## 個別懇談会について

7月30日（木）～8月4日（火）の期間に個別懇談会を実施します。今年度は家庭訪問や学級懇談会を1学期に実施することができませんでした。この機会に、保護者の皆様と、学級の様子やお子さんの成長について、お話ができればと考えています。お忙しいこととは存じますが、どうぞよろしくお願い致します。

\*個別懇談会期間中は3時間授業です。（11時45分下校）

\*5年生のみ8月5日（水）を予備日としております。

みんなで協力したらうまくいく

「協力する気持ちがあれば、どんなこともうまくいく！」

アドラーは、人と協力してやることはうまくいくという考え方なんだ。人と協力すると、いろいろな見方や考え方の中で物事が進むから、間違いが少なくなるんだ。もしうまくいかないことがあったら、それは、協力が足りないということになるね。アドラーは、協力することは人生における真理（誰にとっても正しいこと）であると言っているよ。

これを読んだ人は、「自分には協力する力があること」がわかったね。学校でも、みんなと協力しよう。  
（「超訳 こどもアドラーの言葉」 齋藤 孝 著より）